



収量が多く
輸送性や日持ち性に優れる
夏秋どり向け
四季成り性イチゴ

夏のしずく

Natsu no shizuku

特徴

★寒冷地・高冷地における夏秋どり栽培で、夏～秋の端境期に連続して収穫できます。

★輸送性や日持ち性に関わる果実硬度が高くケーキ等の業務需要に適しています。

★夏季冷涼な地域では、3t/10a以上の収量が見込めます。



育成のねらい

イチゴは生食用やケーキ等の業務用として周年需要がありますが、6月から11月にかけての夏秋期は生産量が落ち込み端境期となっています。国内の寒冷地・高冷地では、冷涼な気候を活かして、夏秋期に果実を収穫する夏秋どり栽培が行われており、高単価販売による高収益経営が実現されています。夏秋どり栽培で用いられる四季成り性イチゴは、夏や秋にも花が咲き果実が収穫できますが、収量性や日持ち性、輸送性などの改良が求められてきました。そこで、これらの点を改良した四季成り性イチゴ新品種「夏のしずく」を育成しました。

★品種名「夏のしずく」は、夏にとれるみずみずしく、爽やかな酸味のイチゴをイメージして名づけられました。

栽培上の留意点

- 栽培適地は北海道や東北、関東・中部地方などの寒冷地・高冷地（概ね高温期の最低気温が20℃以下ならびに最高気温が30℃以下の地点）です。
- 栽培管理は一般的な夏秋どりイチゴに準じます。
- 大株になるため、株間は25～30cm以上にします。
- 旺盛な生育が見られる芽を3芽以上残し、複数の芽に花房を発生させることで、株当たり収量が多くなります。
- 各種病虫害に対して特に強い抵抗性はもたないため、適切な防除を行います。

品種特性

- 寒冷地や高冷地における夏秋どり栽培に適する四季成り性の品種で、端境期である夏秋期に収穫できます（表1）。

表1 寒冷地・高冷地における「夏のしずく」の栽培暦（参考例）

月	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		
	旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主な栽培作業										定植	摘花房・株養成	収穫													
高温対策												遮光													
自家採苗する場合	低温下で越冬																							低温下で越冬	
病虫害対策																									
給液管理																									
ECの目標値 (dS/m)																									
日あたり給液頻度																									
pHの目標値																									
ハウス内目標気温																									

- 収量は多く、寒冷地や高冷地では3t/10a以上の商品果収量が見込めます（表2）。
- 果実は円錐～長円錐形で、輸送性や日持ち性に関わる果実硬度は高く、また、糖度、酸度ともに高く爽やかな食味で、ケーキ等の業務需要に適します（表2）。
- ランナーの発生本数は多く、増殖は容易です（表2）。

表2 「夏のしずく」の収量特性、果実特性、ランナー数

品種名	商品果収量				平均1果重 (g)	硬度 (gf/φ2mm)	糖度 (°Brix)	酸度 (%)	ランナー数 (本/株)
	果数 (x千個/a)	果重 (t/10a)	標準比	標準比					
夏のしずく	32.5	3.32	242	10.2	44.9	9.7	0.91	13.4	
なつあかり	12.7	1.37	100	10.9	34.5	10.1	0.73	6.3	
サマーベリー	21.1	2.38	173	11.2	29.5	9.9	1.02	9.1	

※岩手県盛岡市において2014～2018年に行った夏秋どり栽培（6-11月）における平均値。栽植密度571株/a。
 ※商品果は、小果（6g未満）や奇形果を除いた、6g以上の果実。標準比は「なつあかり」の収量（果重）を100とした場合の相対値。
 ※ランナー数は7月上旬までに発生した本数。

- 葉は大きく立ち上がって大株となります（写真1）。



※イメージ

お問い合わせ

農研機構東北農業研究センター
 研究推進部 研究推進室
 TEL.019-643-3414
 E-mail: www-tohoku@naro.affrc.go.jp

東北農研

検索

<https://www.naro.go.jp/laboratory/tarc/>

